

P1-050

病棟看護師と院内学級教員の連携の現状と取り組み

尾高 大輔¹、小田 綾²

¹武蔵野赤十字病院 看護部、

²日本赤十字看護大学大学院 看護学研究科 博士課程

【はじめに】

当病棟は子どもと成人の混合病棟であるが、あらゆる診療科における15歳以下の子どもの入院に対応しており、学童の入院においては、病棟保育士や院内学級(小学校、中学校)の教員と連携し、入院中の学習支援や復学支援なども行っている。子どもの日々の病状の変化や一人一人の細かいニーズに関する情報の共有が年々難しくなっており、連携方法に関してスタッフから問題点が挙げられ、現状を見直す必要があった。

【活動方法】

病棟スタッフと院内学級教員に対するアンケートにより連携に関する現状調査を行い、見えてきた課題から業務改善を行った。

【倫理的配慮】

アンケートは無記名で行いデータは個人が特定できないよう加工した。発表に当たり、個人情報保護に努めることを口頭で説明した。

【結果】

アンケート調査期間：2015年6～7月 回答数：31人(88.6%)
集計結果より、毎朝リーダー看護師と教員で行われる申し送りでは、主に子どもの年齢や疾患、安静度や毎日の検査や処置に関する情報交換をしていた。それ以外に教員は、復学に関する情報や気になったエピソードを受け持ち看護師や保育士、師長らとの間で適宜やり取りしていたが、複数の関係者が個々で関わりを持つなかで共有する場は少なかった。連携に関するニーズでは、授業中の子どもの様子や連携ツールの整備といった看護師側のニーズと、点滴や車椅子の移送方法や病気の子どもの対応方法、病棟のシステムなどの教員側のニーズが挙げられた。これらのニーズを盛り込んだ連絡票を作成し、運用方法を統一した。教員に向けた取り組みとして、移送方法などを盛り込んだ安全に関する勉強会を実施した。教員から病棟スタッフに向けた取り組みとして、ニーズの高かった発達障害に関する勉強会を企画実施した。さらに専門看護師が東京都特別支援学級教員を対象とした病弱教育研修において講師を行うなどの活動も行った。

【考察・今後の課題】

連絡票で効率的に情報交換できるようになり、教員による子どもの移送もスムーズになっていった。カンファレンスや勉強会に教員が参加する機会が増えた一方で、連絡票に頼り直接的なコミュニケーションが減った印象があった。また、感染予防対策や虐待疑いの子どもへの支援、小児がんや慢性疾患患者などの復学支援に関する情報共有などに課題が残されている。今後は、より全人的な情報の共有や対話から生まれる連携の強化を目指したい。